

18歳『史記』の「伯夷伝」に感銘を受ける
34歳 2代目水戸藩主になる
45歳 史局「彰考館」を開設
63歳 藩主を引退、水戸黄門になる

GREAT LIFE

偉人の人生をのぞいてみれば

vol. 12

徳川 光圀

»»» Tokugawa Mitsukuni

知っているようで知らない 水戸黄門の実人生

»»» 脚色に埋もれた前半生

水戸黄門こと徳川光圀が初代水戸藩主の息子として生を受けたのは、まだ戦国時代の気風が色濃く残る1628年（寛永5年）のことだった。徳川将軍家に次ぐ家格を持つ三つの分家（御三家）の一つである水戸藩の跡取りとして、何不自由のない幼少時代を送ったように見える光圀だが、彼にも彼なりの葛藤があった。実は光圀には上に1人兄がいたのだが、彼が病弱であるという理由から光圀が跡取りに選ばれたのである。

生来の利発な性格と跡取りとしての窮屈な立場、あるいは兄への罪悪感など諸々の事情や感情が絡み合ったのか、思春期の光圀は乱れた格好をして街を練り歩く不良少年だった。だが18歳の時、中国の歴史書『史記』の「伯夷伝」を読んだことで、彼の生活態度は一変する。跡取りの座を譲り合った兄弟の逸話が記された「伯夷伝」に深い感銘を受けた彼は、兄の子を自分の跡取りにする決心をし、以後は学問にも打ち込むようになった。

34歳で藩主になると、寺社改革、裁判の公正化、貧農の救済、産業経済の振興など、精力的に藩政を推し進めていく。取り分け水道の敷設は、良質な飲料水の確保に難儀していた湿地の埋立地に住む住民たちにとって、非常に有り難い施策となった。また明國の遺臣で長崎に亡命していた儒学者・朱舜水を招聘し、師弟の交流を深めたことでも知られている。

しかし光圀の最も有名な功績は、やはり『大日本史』を始めとする数々の書籍の編纂であろう。『史記』のような本格的な日本の通史完成を夢見た彼は、45歳で「彰



1628年生まれ。水戸藩2代目藩主として、貧農の救済や水道の敷設など数々の善政を行い、名君と仰がれる。また史局「彰考館」を開設し、『大日本史』を始めとする数々の書籍編纂の指揮を執った。一般的には水戸黄門の名称で知られている。

考館」と命名した史局（史書を編纂する場所）を開設。家臣たちを各地へ派遣し史料蒐集に当たらせるなどして、『大日本史』の編纂をライフワークとした。残念ながら光圀の在世中に完成には至らなかったものの、彼の死後も途中停滯の時期を挟みながら編纂事業は進められ、明治時代後半、全402巻をもってようやく完成した。

»»» 光圀、黄門様になる

63歳で兄の子に藩主の座を譲った時に権中納言（中納言の唐名が黄門）の位を与えられ、光圀は「水戸黄門」と呼ばれるようになる。実際には助さん格さんをお供に諸国漫遊の旅には出なかったものの、月見の宴を催したり松茸狩りをしたり花見に出かけたりと、ドラマさながらに樂隱居の身の上を楽しんだようである。

その一方である時には、高慢な態度の目立った家臣を手打ちにする大立ち回りを演じており、老いてもなお武士としての強い矜持と正義感を保ち続けていたことが窺える。とはいえたくなる1年ほど前からは体力の衰えが甚だしくなり、関ヶ原の合戦からちょうど100年目に当たる1700年（元禄13年）に73歳でその生涯を閉じた。

脚色されたイメージの方が浸透している偉人は、日本史の中にも何人かいいるが、それにしても光圀の「黄門様」のイメージは根強い。だが彼が弱きを助け強きを挫く庶民のヒーローになった理由は、その生涯のそこかしこに見出せるのではないだろうか。これからも私たちは水戸黄門への親近感の中に、そうとは知らず光圀への敬意を抱き続けるのである。

（執筆／ライター 青山 繁樹）